

遊び場面における幼児の冗談行動について

城戸海輝

(愛媛大学大学院教育学研究科)

目的

幼児の自由遊び場면을観察していると、遊びとして行われる「嘘」、つまり冗談として虚偽の事実を用いる行動がみられる。しかし、先行研究では、幼児の笑いを伴う嘘について、冗談行動としては研究されていない。そのため、本研究では、幼児の冗談行動として、遊戯的サインを伴う虚偽の事実を用いる行動を収集し、虚偽を述べることがなぜ冗談として機能するのかについて考察する。

方法

研究対象児 愛媛県内のA幼稚園の幼児3歳～5歳の124名(年少クラス32名, 年中クラス45名, 年長クラス47名)

観察期間 2017年5月から7月の24日間、登園からおやつ(または弁当)時間までの約2時間の自由遊び場面で観察を行った。

観察方法 ビデオ撮影を用いた行動観察を行った。観察者が遊びへの参加を求められた場合には、遊びの一員として参加した。

分析方法 Charmaz(2006)を参考に、初期のコード化と、焦点化のためのコード化の2段階でのコード化を行った。その後、焦点化されたコードに基づいて事例を分類した。

結果と考察

事例数 総観察時間は、約56.9時間(年少クラス19.0時間, 年中クラス19.4時間, 年長クラス18.5時間)であった。

収集事例の特徴 総事例数は42事例であった(Table 1)。年少児の事例は少ない傾向にあり、冗談行動の受け手は「おとな」(観察者や教師など)が多かった。幼児同士の場合には行動が冗談であることが伝わらず、やりとりが成立しないことが多いのに対し、おとなは、幼児が冗談行動を行った際に、求められている行動を察知し、応対しているため、冗談行動が成立すると考えられる。

Table 1 観察事例数

	年少	年中	年長	対 おとな	対 子ども	計
男児	2	12	9	15	8	23
女児	7	7	5	19	0	19
計	9	19	14	34	8	42

Table 2 虚偽の事実を用いる冗談行動の分類

	タイプ	例	事例 数
受 け 手 が 困 る を 期 待 す る 嫌 が る	型あり	①体を埋める → ②困ったふりをする (虚偽の事実) → ③受け手が心配する ふりをする → ④嘘だったとばらす → ①に戻る	10
	型なし	①攻撃的な言葉(虚偽の事実)を言う → ②受け手が驚き、困るふりをする	8
楽 し さ の 共 有 が あ り	タブー語	①受け手にタブー語(虚偽の事実)言っ て逃げる → ②受け手が追いかける → ③逃げる	4
	型あり	①物を隠して問いかけをする → ②受け 手が正答する → ③否定する → ④受け 手が別の回答をする → ⑤否定する → ⑥受け手が正答する → ⑦再び否定する	11
楽 し さ の 共 有 が あ り な い	型なし	(楽しさの共有ありの場合) ①虚偽の事 実と思われることを言う → ②受け手が 受け入れる → ③虚偽の事実と思われる ことを言う	5
	型なし	①虚偽の事実と思われる ことを言う	4

注: 波線部は冗談行動を示す

カテゴリー化 焦点化されたコードをもとに、幼児の遊戯的サインを伴った冗談行動を分類した(Table 2)。

冗談行動と虚偽の事実の機能 「受け手が困る(嫌がる)ことを期待する」冗談には、「型なし」「型あり」「タブー語」の3タイプがあった。どのタイプでも共通して、行為者は受け手が困ったり、嫌がったりする虚偽の事実を告げるが、笑いや大きな行動などの遊戯的サインを伴っているため、受け手には明らかに冗談であることが伝わる。それゆえ受け手は、冗談の中に関わりたくないというメタメッセージが含まれていると捉え、行為者の楽しさが伝染すると考えられる。

また、「受け手が困ることを期待しない」—「型あり」の冗談では、例えば「これなーんだ？」の問いに対して、どんな答えにも「違う」と受け手の回答を否定する例があげられる。最初は答えを当てられたのをごまかすために否定したものが、二回目以降は否定することを楽しんでおり、故意に虚偽の事実を伝える冗談に発展していると考えられる。そして、行為者の希望通りに遊びをコントロールしようとしていると考えられる。

「受け手が困ることを期待しない」—「型なし」の冗談では、受け手の反応の自由度が高く、行為者の虚偽の事実を伝える行動を冗談と認め、楽しさを共有するかどうかは受け手次第であると言える。